

漱石の恋愛評論

Junko Higasa 2013.12.25

漱石の小説には三角関係を描いたものが多い。そのせいか、敬愛していた嫂：登世や友人の恋人：大塚楠緒子との「具体的な関係」を、かなり激しく追及した評論が多い。しかも「プラトニック」という言葉でさえ「熱烈な Love」という解釈に至る。確かに漱石も男である。そして男女間の恋愛感情と友情の区分は難しい。けれど養家で大人びた神経を持った子供として育ち、母性愛に恵まれず養母の女としての側面を見た漱石が、盲目的に強引な行動に出たとは思えない。また友人に表だって三角関係を仕掛け「譲ります」と公言したとも思えない。鏡子夫人が漱石の体調を心配して旅行に女中を同行させようとした時に「自分も男だから間違いがあってはいけない」と断ったせいか、過去に間違いを犯したという主張もある。逆に「そんなことはありえない」という猛反発もある。それらはあらゆる資料を照合して「立証された」と信じられる。けれどちょっとした軽い病の症状が殆ど癌症状に一致するのと同様に、結び付けようと思えば何でも癌の心配に結びつく。

私は「夢想的精神と現実性」「理性的行動抑制」の中に起る恋愛自体に対する思慕憧憬なしには、あのような三角関係の葛藤は描けないのではないかと思う。事は「プラトニック・ラヴ」の捉え方の問題で、漱石の Love は天と人間の間が存在したと思う。それを人間と地面の間から見ているのが評論家だと思う。